

柏木教会月報

10月号

東京都新宿区北新宿3-1-18

☎03-3368-2156

神の言葉による出発

ネヘミヤ記七章七二節後半～八章一二節

牧師 大浦 勝

彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。（八章三節）

バビロン捕囚から解放されたイスラエルの人々は、大きな希望をもって帰国するが、國の再建は容易ではなかった。国土は荒れ果て、神殿は焼き払われ、エルサレムの城壁は崩されたままであった。生活は苦しく、困難であつた。イスラエルの再興を望まない周辺の諸民族は、あからさまな妨害を繰り返した。帰国してから二〇年余り後の紀元前五一五年に、彼らはようやく神殿を再建する。紀元前四四五五年には、帰国したネヘミヤの指導の下にエルサレムの城壁を修理する。生活もやや安定し、神の民として再出発するための条件は整ってきた。

しかし、神殿が再建され、城壁が修理され、生活が安定しても、それで神の民としての歩みがなされるのではないか。宗教改革者たちが教えたように、「神の言葉が正しく語られ、正しく聞かれるところ、そこに教会がある」。何よりも神の言葉が語られ、聞かれるのないならば、外的な条件がどれ程整えられても、神の民としての再出発はあり得ない。神の民は「主の口から出るすべての言

葉によって生きる」からである（申命八・一一）。

律法学者であり祭司であるエズラはモーセの律法の書をバビロンから持ち帰り、第七の月の一日（後にこの日が新年の最初の日となる）、エルサレムの広場に集まつた会衆に向かってこれを読み上げる。レビ人たちは読み上げられた箇所を日常語のアラム語に翻訳し、その意味について説明した（七～八節）。民は皆、律法の朗説に耳を傾け、教えられたことを理解した（三、一二節）。

神の言葉が語られ、聞かれるとき、そこに神のみわざが行われ、神の民としての歩みが始まる。そこではみ言葉に基づく悔い改め（九節）と「主を喜び祝うこと」（一〇節）が起つた。神の言葉によって泣き、また喜ぶ。打ち倒され、また立ち上がる。ここに神の言葉によって生きる神の民の姿がある。それゆえ、神殿の再建や城壁の修復に優って、何よりもこの日が、捕囚後のイスラエルの人々の神の民としての再出発の日であり、後にこの日は「大集会の日」として覚えられることになる。

今日わたしたちは教会建設七五周年記念礼拝の日を迎えた。神は語られるみ言葉と共に働き、またみ言葉を通して働き、救いのみわざをおこない、神の民をかたちづくり、この教会をキリストの教会として歩ませてください。教会の土台は神の言葉そのものであられるイエス・キリストである。キリストはわたしたちの贖いを成しこそ、復活して天に昇り、父の右に座して、永遠にわたしたちを治めておられる。このキリストに聞き、このキリストを宣べ伝えることが、わたしたちの変わらないいつとめであり、光榮であることを改めて確認したい。